

浜松科学館における博物館実習

事業企画グループ チーフエディケーター上野 元嗣

概要

浜松科学館では、毎年、博物館実習を行っている。近年は、学芸員職の人気が高く、毎年10名前後の実習生を受け入れている。当館での博物館実習とは、実際に何を行っているのか、今回は実習内容の報告を中心にまとめる。

1. はじめに

博物館実習とは、博物館法施行規則第1条に基づき、大学において修得すべき博物館に関する科目の一つとされており、登録博物館又は博物館相当施設における実習により修得するものとされている。

(ねらい)

学芸員養成教育において学んだ知識・技術や理論を生かして、学内及び館園での実体験や実技を通して、学芸員として必要とされる知識・技術等の基礎・基本を修得することを目標とする。

(「博物館実習ガイドブック」より)

当館は、博物館法制度上の区分では博物館類似施設にあたるが、開館当初より博物館実習の受け入れを行っていた。2019年に全面リニューアルを行った際、指定管理者が民間事業者に移行、管理・運営方針やスタッフが大きく変わったことから、博物館実習についても内容の見直しを行った。博物館法や文部科学省が作成提案している「博物館実習ガイドライン」に基づいた内容に加え、浜松ならではの視点を盛り込んだ実習内容とした。

2. 浜松科学館での博物館実習

当館の実習期間は10日と設定している。実習生にとって10日で博物館のすべて学ぶことは不可能であるが、できるだけ広い視野を持ち、多くのことを吸収、学んでもらいたいと願っている。

そこで、博物館について効率よく学んでもらえることはもちろんであるが、当館が掲げる使命と事業目標(資料1)に基づき「浜松らしい」オリジナルプログラムを考案し、実施している。

3. 実習概要

実習期間は、9月の10日間とし、2023年度は、7名が実習に参加した。大学は以下の通り。

実習参加校と人数 (2023年度)	
帯広畜産大学 (北海道)	1
桜美林大学 (東京都)	1
お茶の水女子大学 (東京都)	1
東京学芸大学 (東京都)	1
昭和音楽大学 (神奈川県)	1
同朋大学 (愛知県)	1
名城大学 (愛知県)	1

(人)

応募規定は、「10日間当館に通い、実習に参加できる者」としている。専門が科学分野でなくてもかまわない。地元が浜松であるという実習生が多いが、遠方からの参加者は期間中ホテルに滞在する人もいる。

4. カリキュラム

日程	内容
1日目	ガイダンス オリエンテーション 館内見学
2日目	サイエンスコミュニケーション研修 プラネタリウム研修 生解説プラネタリウム見学 大型映像見学
3日目	展示調査1 プラネタリウム学習番組見学 シャボン玉フェスタ準備
4日目	キッズプラネタリウム見学 展示室巡回、展示解説業務 企画会議
5日目	シャボン玉フェス運営 アンケート調査
6日目	成果発表準備 (企画会議、教材開発)
7日目	成果発表準備 (企画会議、教材開発)
8日目	成果発表準備 (企画会議、教材開発)
9日目	成果発表
10日目	成果発表

途中、休日設定あり

5. 実習内容

〈初日〉

ガイダンス、オリエンテーション

館内見学

ここで指定管理者制度、当館の概要など座学中心で行う。館内見学は、一般来館者が立ち入ることが出来ない部分、バックヤードはもちろん、屋上なども見学した。

〈2日目〉

サイエンスコミュニケーション研修

学芸員個人のスキルを十分に活かし、半日をかけてサイエンスコミュニケーション (SC) についての講座を開催した。まだまだ切り離されて考えられることも多

い学芸員とサイエンスコミュニケーターだが、私は密接な関係にあると考えており、学芸員こそSCであるべきだと思う。コミュニケーションを重要視している当館の事業目標にも深く関わっている部分であり、浜松ならではの实習内容である。

プラネタリウム見学

午後は、プラネタリウムの見学を行った。当館は、プラネタリウム番組を職員が制作している。ここにも学芸員の要素が十分に詰まっている。オリジナル番組と映像制作会社が制作した大型映像を見比べて、様々な観点から比較し、実習生同士でディスカッションを行った。それぞれのメリットや自分ならどのような番組を作るかなど、活発な意見交換が行われた。番組見学前には、コンソールでの操作体験を行った。あくまで、体験であるので、楽しく参加してもらえ。緩急のあるプログラムにすることで、実習生への負担も軽減する目的がある。

〈3日目〉

展示調査1

実際に展示室へ出向き、展示に関する調査を行った。調査は以下のように行った。

1. まずは来館者として展示に触れる (遊ぶ)
2. この展示が伝えたい科学現象は何か、それが正しく伝わっているかを読み取る
3. 実習生同士でディスカッションを行う
4. 職員から展示のねらいなどを解説する
5. 来館者を観察し、読み取った事象が正しく伝わっているかを調査する
6. 特に、子どもたちはどのように体験して何を感じているのかを記録する
(5、6は対象の展示物から少し離れて調査する)
7. 実習生が展示物の横に立ち、使い方を説明し感想を聞くなどをして、体験者とコミュニケーションを取る

このような流れで行うと、展示資料 (展示物) の取り扱い、展示手法、来館者調査、コミュニケーション等多くの事象が学べ、学芸員にとって必要なスキルを身につけることができる。当館では、実習中にこれを数回行っている。

シャボン玉フェス準備

当館の実習は10日間行うが、5日前後で職員が企画している事業の運営を経験する。ここ数年は、来館者にも人気の高い「シャボン玉フェス」を実習に組み入れている。本事業は、科学館サイエンスパークで実施し、シャボン玉あそび体験、オリジナルシャボン玉液づくり、職員によるデモンストレーションを行うもので、参加型のワークショップやサイエンスショーの要素も含まれており、科学館で行うさまざまな事業を一度に体験できるものである。このイベントを練習として運営することで、学芸員としてのスキルを身につけてもらうことができる。初回は、イベントの概要説明やシャボン玉の練習などを行った。

〈4日目〉

企画会議

展示調査を進める傍ら、成果発表となる企画会議を行う。当館では、最終的な成果発表としてミニ企画展を開催する。以前は、全員で一つの展示を分担する方法を試したこともあったが、実習生それぞれの専門性の違いから上手くいかないこともあったため、現在は全体的なテーマを設定し、各展示物は個々の実習生が担当することとしている。7名の実習生がいるので、展示物が7つ出来ることになる。

テーマを上手く設定することで、個人個人でのアプローチができ、制作を行うことができる。また、地域の特徴にも目を向けてもらう。

テーマ設定の流れ

1. 大テーマを全員でディスカッション
2. 大テーマの決定
3. 大テーマに添って、気になる現象をピックアップ
4. その中から、個人で担当するものを選定



【2023年度のテーマ】

『かくれた科学を見つけてみよう』

この内容について、各自が取り組みやすいものを設定した。各テーマについては、以下の通り。

- ・お鍋やボウルにお皿がはまって抜けないのはなぜ？
- ・笠雲ってなに？
- ・泡ってなに？
- ・太陽の光でものがいるあせるのはなぜ？
- ・早く果物をおいしく食べるには？
- ・ハンドルをまわすだけで、温度が変わるのはなぜ？
- ・かげはなんで黒色なの？
- ・持ち帰り企画 バスボムづくり

地域の特徴を意識して考えてもらうと、静岡では富士山が見える、富士山にかかる笠雲に興味があるという意見から、笠雲がテーマの1つに入った。

持ち帰り企画については、職員は求めていなかったが、実習生の意向で追加した。このように自由に意見を出しながら、内容を変更できるのも良い点である。

〈5日目〉

シャボン玉フェス運営

1日を使って、事業を実施した。運営スタイルは実習生に決めてもらい、自由にイベントを行ってもらった。最初は、戸惑いも多かったようであるが、各所に創意工夫が見られた。この段階で、成功体験を味わい、成果発表へ活かすことが大きな目的である。実際に、このイベント後に企画展のレイアウトなどを変更している様子がみられた。





アンケート調査

アンケート調査は、退館する来館者に対して、声掛けをしながらアンケートを記入してもらうものである。イベントとはまた違ったコミュニケーションの取り方が学べ、来館者のリアルな声を聞くことができる

〈6日目～8日目〉

成果発表準備（企画会議、教材開発）

各自のテーマに沿って、準備を進める。物品の購入は、職員が取りまとめて行った。

作成した展示物のプレゼンテーションの時間は十分に確保し、他の実習生のテーマについても全員が理解し、説明できるようになるまでコミュニケーションを取る。また、それぞれの内容を全員で精査して精度を高めた。

〈9日目〉

成果発表

企画展の会場には実習生が常駐し、デモンストレーションや解説を行った。成果発表は1日だけに設定している博物館も多いが、当館では必ず2日間設定している。これは、1日目で反省、改善点を出し翌日に活かすためである。



〈10日目〉

振り返り、反省

実習全体を通しての振り返り、反省は時間をかけて行った。実習内容はもとより、科学館の事業や運営に対してもフィードバックしてもらい、来年度以降の博物館実習、科学館の運営に活かしている。

6. 博物館実習で得るもの

学芸員資格や博物館の仕事は人気がある一方で、採用が毎年あるわけでもなく、指定管理制度の問題、契約職員が多く終身雇用がないなど、厳しい面も多く、学芸員資格をそのまま活かせる実習生は少ないかもしれない。当館でも今までの実習生にアンケートをとったり、就職先を調査したりしているわけではない。

このように書くと、博物館実習は負担が大きいだけではないかと、思われるかもしれない。10日間かけて行う実習の最大のメリットは、博物館の仲間やファンを増やすことだと考えている。当館のミッションや事業目標（資料1）にも掲げているが、さまざまなパートナーを増やすことで、今後の科学館にとっては間違いなく、強みになる。また、自分がそうであったように、博物館好き科学館好きを増やしたい！と心から願っている。

参考資料

(資料1)

浜松科学館第2次中期計画(3か年/2022年度~2024年度)』に基づいた、運営者として目指すべき10年間の使命・目的と3か年の事業目標

使命(ミッション)

『浜松科学館は、科学を入り口とした多様な文化交流を通して人々をつなぎ、地域への誇りと愛着をもとに、創造都市を牽引する科学館となることを目指します。さらに、誰もが科学を楽しみ、安心して学ぶことができ、ひとりひとりの好奇心を育む場として地域に開かれた科学館となります。』

事業目標

1 創発的な学びの場を構築

浜松科学館は、多様な利用者それぞれに向けた科学教育のコンテンツを自ら作り上げ、コミュニケーションを重視した創発的な学びの場を構築します。

2 地域に開かれ、市民に愛される科学館づくり

浜松科学館は、公共施設として利用者だけではなく地域全体に開かれた場をつくり、職員が地域と積極的に関わりをもち、市民に愛される科学館となります。

3 協働による新たな視点の提供と地域固有の価値向上

地域固有の価値を高めるために、さまざまなパートナーと協働することで浜松科学館ならではの新たな視点を提供していきます。

4 持続可能性の向上を目指した適正なマネジメント

浜松科学館は、施設の持続可能性を向上させるため、設備やコンテンツ、人的資源を適正にマネジメントし、独立性の高い経営を行います。

参考文献

・博物館実習ガイドライン 2009 文部科学省